

居住空間からみたベトナムのオンタオ（竈神）祭祀 —ホイアンの事例報告—

鍋田尚子[※]

1. はじめに

ベトナム・キン（京）またはベト（越）族の家では台所の神さまとされる「オンタオ」（*ông Táo*）が祀られている。女神1柱、男神2柱の3神から成るオンタオは、現在でも家族を見守る重要な神として信仰され、毎年陰暦12月23日にはオンタオを天に送る送神儀礼が行われる。台所の神ではあるが、北部地域では現在、台所ではなく祖先の祭壇に香炉を置いてオンタオを祀っている。中部・南部地域は台所にオンタオの祭壇が作られている。しかし、中部地域の家では現在使用している台所（ガスコンロ）ではなく、昔の台所（炉）の上部に祭壇が置かれていることがある。

オンタオは「東厨司命灶君」という尊称をもつ。ハノイの玉山祠には本殿の後堂に「東厨司命竈府神君」と書かれた字牌が、中央に祀られたベトナムの軍神チャン・フン・ダオから見て左側に配置されている。ベトナムでは寺院や王宮だけでなく、民間の人々も生活に風水思想を取り入れている。家主の生まれ年によって吉日や吉方位は決まるとされ、家を建てたり大きな出来事があるときは占い師に見てもらおうという。それなら家族を守る重要な神として信仰されているオンタオは、どのような方位で祀られているのだろうか。

これまでのオンタオ研究は、祭祀の方法やオンタオの役割などについて述べたものが多く、方位や配置についての記述は少ない。

※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士
後期課程

チャン・ゴック・テム（*Tran Ngọc Them*）は、祖先の祭壇でオンタオを祀るときに、五行で中央の次に重要な場所である東＝左側に香炉を置くこと、オンタオ3神は八卦の二陽一陰の「離」を表すと記している（*Tran Ngọc Them 1999:139-140*）。フィン・ゴック・チャン（*Huỳnh Ngọc Trảng*）もオンタオ3神には中国八卦が影響していると述べている（*Huỳnh Ngọc Trảng 2013:35*）。しかし、実際にオンタオが祀られている方位や配置についての調査はおこなわれていない。

ベトナムの伝統住居の研究は、昭和女子大学が建築学的調査をベトナム12省でおこなっている（昭和女子大学国際文化研究所紀要1994,1999,2001,2005）。伝統的な村であるハタイ省ドゥオンラム村、トゥアティエン・フエ省フォックティック村では集落調査がおこなわれている（昭和女子大学国際文化研究所紀2006,2011、奈良文化財研究所2011）。家屋の詳細な調査が報告され、配置図も記されているが台所の配置についての詳しい記述はない。

以上のように台所やオンタオ祭壇を家屋の配置や方位から調査し言及したものはない。また、キン族の人々の居住空間を信仰や祭祀と関連づけた研究はおこなわれていない。

本稿ではホイアン旧市街の民家の調査をとおして、台所とオンタオ祭壇の配置と方位、オンタオ祭祀の実態について述べていく。ホイアンの事例を提示し整理することで今後、居住空間とオンタオ祭祀について研究を進めていくための端緒としたい。

2. ホイアンの概況

クアンナム省ホイアン市は、中部の特別市ダナンから南方約30kmに位置する。中部山地の最高峰であるゴクリン (Ngoc Linh, 2598m) 山を水源とするトゥーボン (Thu Bon) 川が町の南を流れ、旧市街から5kmほどの河口クアダイ (Cua Dai) にそそぐ。ホイアン市は河口部左岸にひらけた港町である (菊池 2002:7)。

ホイアンの歴史は初期金属器時代のサーフィン文化まで遡ることができる。2世紀から15世紀頃まで中部ベトナム一帯を支配していたチャンパ王国の聖地ミーソン遺跡群や都跡チャキウ遺跡が現在も残されている (菊池 2002: 10)。ホイアンはチャンパ王国の時代から貿易港として栄え、特に16世紀以降、ヨーロッパの商人の東南アジア進出

により注目されるようになる。17世紀初頭には生糸や砂糖、香木を求めて多くの日本人の貿易商がホイアンを訪れ日本町も作られた。しかし、江戸幕府の鎖国政策により日本町は衰退していく。その後、ホイアンの繁栄を支えたのは中国系移民であり、ホイアンにおける中国系移民の増加は、1644年の明の滅亡前後に始まると考えられている (三尾 2006:88)。

現在の旧市街に残る町並みは、19世紀初頭以降に造られた木造町家群や20世紀初頭に造られた洋風建物群が残り (菊池 2002:10)、1985年にベトナム政府により国の重要文化財に指定された。1999年には、ホイアンの旧市街はユネスコの世界遺産に登録されている。

3. ホイアンの家屋

ホイアンの伝統的な住居について、昭和女子大学が詳細な調査をおこなっている。その調査資料を参照して家屋の特徴を述べていきたい。

ホイアンの旧市街には、19世紀から20世紀初頭にかけて建てられた約400棟もの歴史的建造物が遺されており、その中には町屋も含まれている (平・羽生 1995: 40)。ホイアンの町家の伝統的・典型的な特徴として、配置は間口が狭く奥行き大きい敷地に道路側から、前家、中庭、後ろ家、後ろ庭が配置され、中庭には、前家と後ろ家とをつなぐ橋家が設けられる (久布白・福川 1995: 45-46)。屋根は切妻が主である。橋家は入母屋が一般的であり、橋家の屋根と前家、後ろ家の屋根の間にも谷ができる (久布白・福川 1995: 46)。この町屋は、ロイ¹ (Roi) と呼ばれる中部クアンチ省からフエに多く見られる形式がルーツであり、(福川・友田 1996: 84)、中国本土やマラッカ等の華僑街の形式と異なり、中部フエの形式と酷似する (友田・篠崎 2001:1)。



図1 ベトナム・ホイアン地図

ホイアの町屋は、基本は都市住居として普遍的な性格に根ざし、同時にベトナム中部特有の建築構法や様式に基づき、そこに中国や西洋風の装飾が加えられ作られている（福川・友田1996:84）。

4. ホイアンのカマド

旧市街には、ホイアンでしか見ることのないカマドの形態がある。ベトナムの多くの家では、古くは地炉に土製支脚を置いて使用していた²。その後、移動式土製焜炉や鉄の五徳へと変化し、現在は高台でガスコンロが使用されている。しかし、ホイアンには他地域の台所形態の変化と異なるホイアン独自の造り付けのカマドが作られ、40～50年前まで使用されてきた（図2）。

ホイアンの昔のカマドを調査したチャン・ティ・レ・スアン（Trần Thị Lê Xuân）は、ホイアンのカマドは19世紀末から20世紀初頭にかけて作られた旧市街特有のものであり、ホイアンが交易の重要な場であったことがカマドの形態にも影響していると記している（Trần Thị Lê Xuân 2010）。また現在、旧市街には9つのカマドが残されており、そのうち4つはまだ家族の生活のなかで使用されている（Trần Thị Lê Xuân 2010）。

このカマドは、筆者の聞き取りでは、石灰・漆喰・サトウキビの蜜を使って作られており、熱に強いのだという。カマドの大きさ

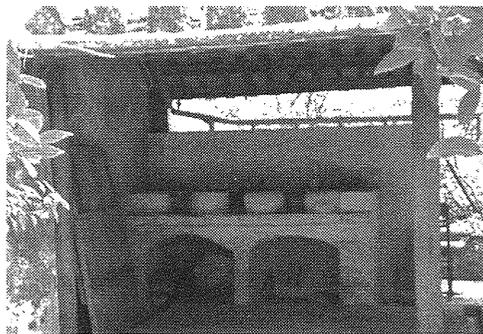


図2 貿易陶磁博物館に置かれたカマド

は家によって異なるが、3つ口または4つ口のカマドである。そのカマドの口には鉄が並行に、または3ヶ所にはめ込まれている。

チャン・ティ・レ・スアンは、カマドの方位は民間によると、いつも西を向くよう左（東）に置き、東に置かない場合は南または西の方角に置き、それ以外の方向は全てよくないと記している（Trần Thị Lê Xuân 2010）。またオンタオ祭壇について、カマドの上部でオンタオを祀り、もし十分に祀る場所がなければ、台所の南側の角に置く。理由はカマドの神は火に属するため南に置く必要があると述べている（Trần Thị Lê Xuân 2010）。火と方位について、またカマドの神オンタオと火が関係することについては詳しく説明されていない。

次に実際のホイアンの民家ではどのようにカマドが置かれ、オンタオが祀られているのかを見ていきたい。

5. ホイアンの事例報告

家屋調査と聞き取りは、①2011年8月8日～12日、②2013年6月27日に実施した。ホイアン市の文化遺跡の管理をおこなっているホイアン遺跡保存センターの紹介により旧市街にある昔のカマドの残る伝統的民家で調査をおこなった。ここでは5つの事例を取り上げる。

建築調査から詳細な家屋の平面図や配置図が報告されているため、ここではオンタオに関する配置を中心に描いた見取り図を掲載する。

事例1) トウ・ファップ (Thu Pháp) 邸 (図3)

土産物屋を営み、店にはベトナムや中国の書が置かれている（図4）。家屋の奥に昔のカマドがある。家主によると、1975年までカマドを実際に使用していたという。カマドは4つ口の作り付けカマドである。そ

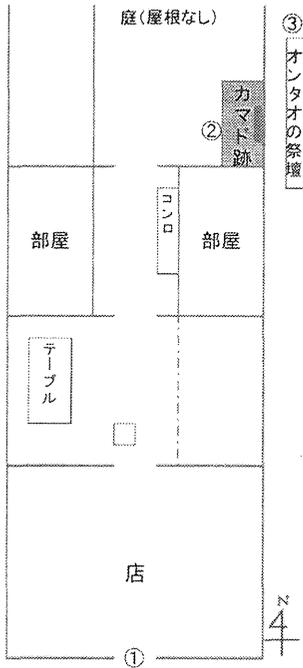


図3 トウ・ファップ邸見取り図

のカマドを祭壇としてオンタオを祀っている(図5)。現在調理に使用しているのは、移動式コンロでありカマドと店の間の部屋の前の地面に置かれている。コンロの周りにはオンタオを祀るものは何もない。

カマドとオンタオの祭壇は、自然方位としての東側に置かれている。家主によると、カマドと祭壇は東側と決められているが、理由は分からないという。祭壇には、赤い紙に「定福灶君」と書かれ額に入れられた字牌(家主が書いたもの)、香炉、燭台2つ、花瓶がある。また、オンタオの禁忌として、祭壇の前の空間には不浄なものをおいてはいけないという。

オンタオを天に見送る送神儀礼では、果物・花・甘いお菓子を供えて、家族の平安を祈る。オンタオは優しい神で、子どもが病気になったときに線香をあげると治るといふ。

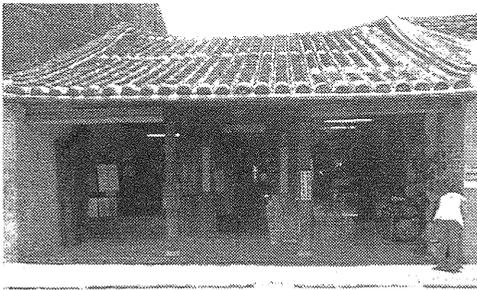


図4 ①家屋正面

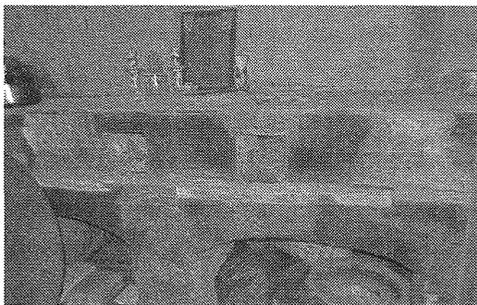


図5 ②③カマドとオンタオ祭壇

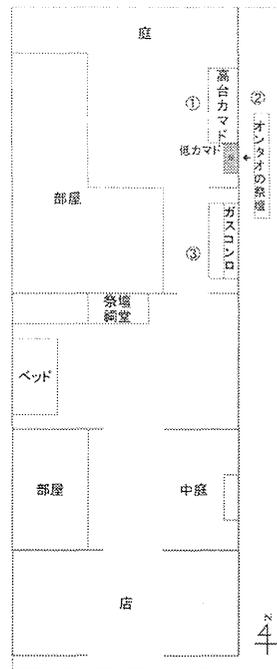


図6 チャン・ティ邸見取り図

事例2) チャン・ティ(Trang Thy)邸 (図6)

チャン・ティ邸では、108歳(2013年)になる女性が暮らしている。女性は高齢のため話が出来ず、お世話をしている女性に話を聞いた。その女性によると、チャン・ティ邸の祖先は中国人で、現在は息子が家主となっているが、別の地域に住んでいるとのことである。

カマドは家屋の1番奥にある。作り付け

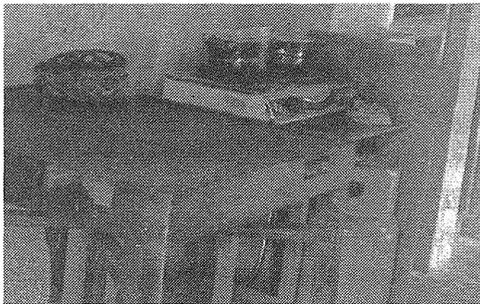


図7 ③ガスコンロ

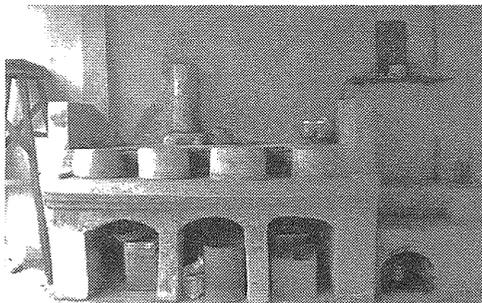


図8 ①カマドとオンタオ祭壇

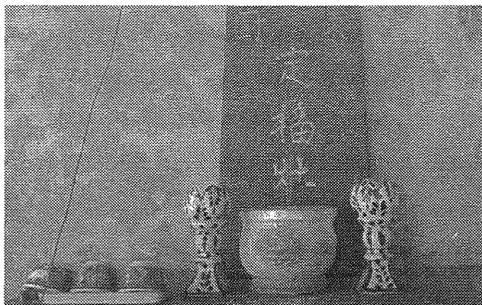


図9 ②オンタオ祭壇 字牌

の高台カマド(3つ口)と左側に低いカマドがある(図8)。どちらのカマドも現在は使用されていない。低いカマドの上部にオンタオの祭壇が作られている(図9)。カマドと祭壇の方位は自然方位の東である。祭壇は赤い板で作られ、そこに赤い木の板に金色の文字で「東厨 定福灶君」と書かれた字牌と香炉、燭台2つ、小さなカップ3つが置かれている。現在の台所はカマドの手前の空間、通路の脇にガスコンロが置かれている(図7)。非常に簡素な作りで、ガスコンロの周りにはオンタオに関するものはないもない。

毎月陰暦1.15日には、オンタオ祭壇に線香と果物を供えている。送神儀礼では果物と冥器(Mā)を供え、冥器は紙銭やオンタオの紙の服で、供えたあとで燃やすという。

事例3) アン・ズン(An Dung)邸

家主 タイ・ティエン・ゴン(Thai Thien Ngòn)氏は57歳(2013年)。前家の部分は土産物屋になっているが、場所を貸しているだけで経営は行っていない。現在ゴン氏は別の地域に住んでいる。家屋は100年程前に建てられ、当時は漢方屋であった。祖先の出身は福建省で、現在でも福建の繋がりは大事にしているという。

家の奥に台所がある。カマドは多少の修復はしているが、100年前に家を建てたときのままである。石灰・漆喰・サトウキビの蜜を使って作られており、熱に強いのだと言う(図10)。またカマドの上の天上には、煙が上に向かうような工夫がされており、当時の職人の技術によるものであるという。オンタオの祭壇はカマドの上部に作られている(図11)。カマドやオンタオの祭壇の位置は自然方位の東である。タイ・ティエン・ゴン氏によると、カマドを使うときに顔を東を向くことが大事であるという。現在、

カマドは1年に数回、祖先の命日などの特別な料理を作るときに使用する。日常は西側に置かれたガスコンロを使用している。しかし使用頻度に関わりなく、カマドが主、ガスコンロは副であり、主のものは東を向くことが大事であるという。



図10 カマドとオンタオ祭壇

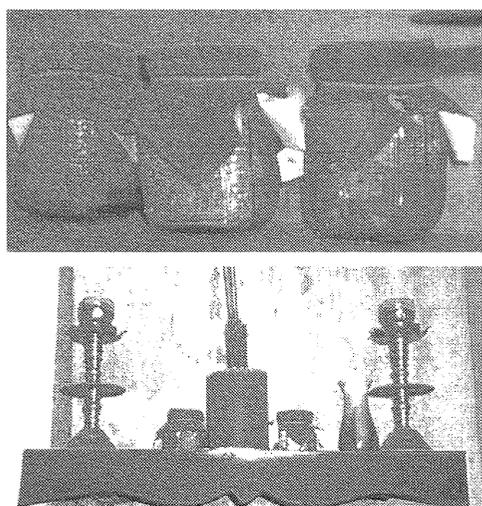


図11 オンタオ祭壇(下)
祭壇に置かれた塩・米・水(上)

オンタオの祭壇には香炉と燭台2つ、花瓶、瓶が3つ置かれている。字牌はない。字牌は当初から置かれていないという。祭壇に置かれた香炉は赤一色であり、奥にあるビンにも蓋の上から赤い紙が巻かれている。3つの瓶に入っているものは、塩・米・水であり昔から変わっていない。中身の塩と米はほとんど変えずに、水は蒸発した分を足すのみである。昨年瓶が割れて新しくしたが、基本は、上に巻かれた赤い紙も捨てることはなく、紙を変える場合は上に重ねていくという。

送神儀礼では、お茶とお酒を3杯ずつと檳榔、時々ぜんざいとおこわも供えている。オンタオの好物はお茶と水飴である。水飴は近年供えるようになったという。

オンタオの役割は家族の保護と生活の安定であり、家族や兄弟が仲良く出世できるのはオンタオのおかげであるという。

事例4) クアン・タン (Quan Thang) 邸 (図12)

現在、5代目から8代目までの4世代が暮らしている。祖先は中国福建省出身である。築300年の家屋は現在、ホイアン旧市街の観光スポットのひとつとなっている。

北側に面した入り口を入るとすぐに両側に部屋がある。その先に祖先の祭壇が上部に作られている。少し先に進むと、左右の壁に祭壇が設置され、東側の祭壇には「福德正神 司命灶君」の文字が記されている。西側の祭壇には「天官賜福」の文字が記されている(図15)。この2つの祭壇が置かれた経緯については分からないという。

台所は家屋の1番奥に作られている。昔のカマドは自然方位の東の壁に作り付けてあり、3つ口カマドと北側に低い1つ口のカマドがある(図13)。どちらのカマドも現在は使用していない。オンタオの祭壇は3つ口カマドの上部に設置されている。赤い板

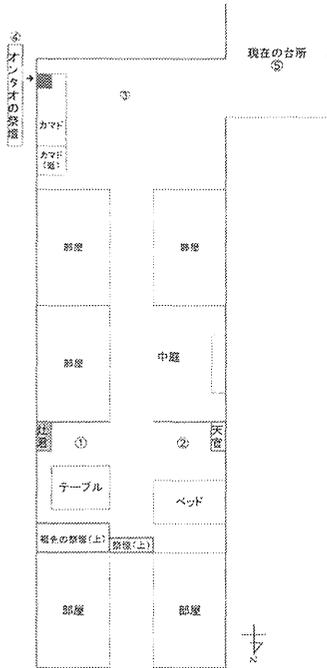


図12 クアン・タン邸見取り図

で作られた祭壇には、同じく赤い木の板に金色で「定福灶君」と書かれた字牌が中央に置かれ(図14)、燭台2つ、小さなカップが3つ置かれている。6代目にあたる女性によると、オンタオの祭壇は家を作った時からあり、祭壇の位置は家主の合う方向を専門家に頼んでみてもらうという。

現在使用している台所は西側の奥に作られている。手前に小さなカマドがあり、奥にガスコンロが置かれている(図16)。台所にはオンタオを祀るものは置かれていない。

送神儀礼では、冥器と甘いものを供えている。冥器は市場に売られているオンタオセット(オンタオの紙服などが入っている)を購入している。

事例5) ドウック・アン (Đức An) 邸 (図17)

家主は現在6代目、漢方店を営んでいる

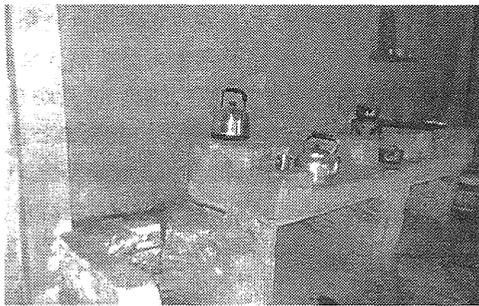


図13 ③カマドとオンタオ祭壇



図15 ①司命灶君(左)②天官賜福(右)

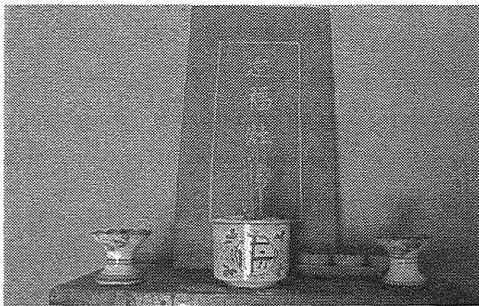


図14 ④オンタオ祭壇 字牌

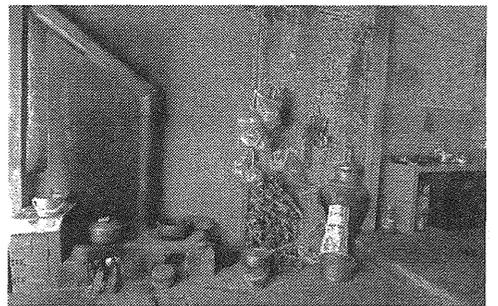


図16 ⑤現在の台所 カマドとガスコンロ

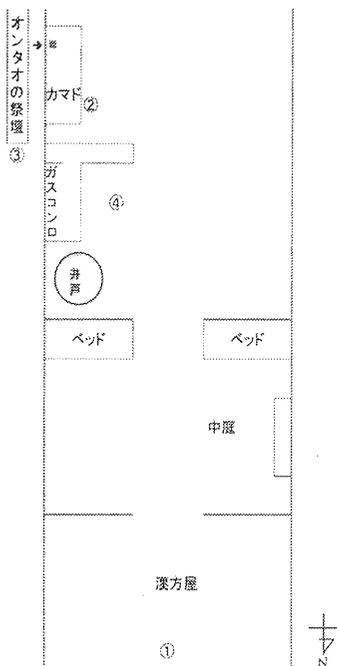


図 17 ドウク・アン邸見取り図

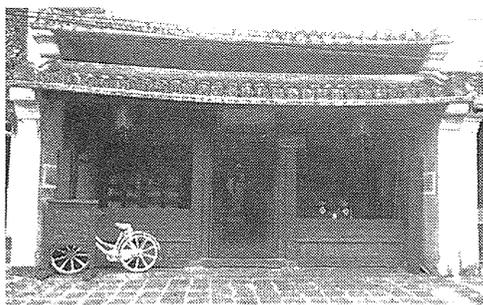


図 18 ①家屋正面

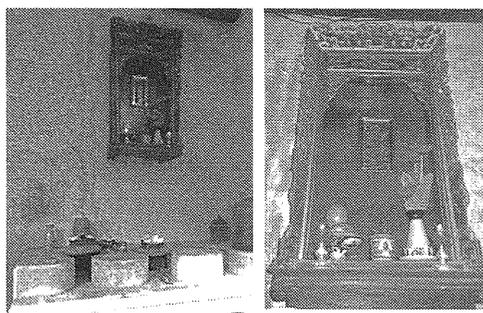


図 19 ②③カマドとオントオ祭壇

る（図 18）。祖先はベトナム人である。店の1番奥に台所があり、昔のカマドが置かれている（図 19）。作り付けの3つ口カマドは、50年程前まで使用しており当時のままのかたちで残している。作り付けのカマドを作ったのは当時のホイアンの影響であろうと話していた。カマドの手前にガスコンロが置かれている（図 20）。

オントオは昔のカマドの上部に箱型の棚が設置され、そのなかで祀られている。昔のカマドとオントオの祭壇は自然方位の東側の壁に作られている。カマドの方位について、東側に西向きにカマドを作ることで、人の顔が東を向くようにするのだという。オントオの祭壇は古く、約150年前から使われている。祭壇のなかは真っ赤に塗られている。そのなかに「定福灶君」の字牌が中央に祀られ、香炉、ランプ2つ、花瓶、果物が置かれている。字牌は新しい。祭壇のなかは東に花瓶、西に果物（果物は山を表現）を置くという昔からの決まりがあるという。祭壇のなかをみると、祭壇から見て左（東）に花瓶が置かれ、果物は右（西）に置かれているのが分かる。また、送神儀礼のときも普段と同じように果物を供えているという。

家のなかに井戸が作られている。井戸にも神がいるため、井戸の上には何も置けないと話していた。井戸神を祀る香炉が置かれている。

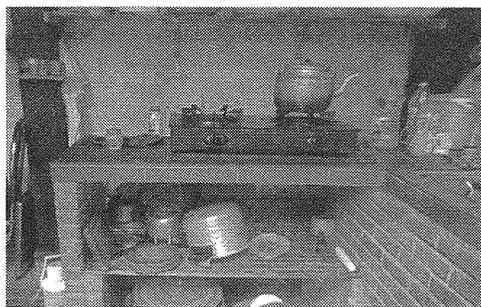


図 20 ガスコンロ

小結

以上、ホイアンの事例をみてきた。5つの事例からホイアンのオンタオを祀る位置と特徴について以下の3点が明らかになった。(1)どの家もガスコンロが置かれた現在の台所にはオンタオを祀るものではなく、昔のカマドのある場所でオンタオの祭壇が置かれている。(2)昔のカマドとオンタオ祭壇は自然方位の東側に作られている。(3)祭壇や字牌、香炉などには必ず赤色が使われている。

オンタオ祭壇の位置については、事例4で祭壇は家主の生まれ年と合う方角と述べているが、実際は他の家と同様に東に置かれている。家主の生まれ年と合う方角が東であるということが出来る。カマドと祭壇は、今回とりあげた事例以外にも3ヶ所の家屋で東に置かれており、貿易陶磁博覧館の奥に残されたカマドも東に置かれている(図21)。チャン・ティ・レ・スアンの述べたカマドを南または西に置く家はなかったが、オンタオ祭壇は東側に置かれたカマドの上部ではあるがカマドの中央ではなく、カマドが並ぶ南側に置く家が事例2と事例4でみられた。また、東にカマドと祭壇を置くことについて、チャン・ティ・レ・スアンはカマドが西を向くように記しているの

に対し、聞き取りでは事例3と事例5では人やカマドが東を向くことが大事だと述べている。表現は異なるが意味は同じであることがわかる。

以上からカマドとオンタオ祭壇の配置について、意識的に東に置かれていることが明らかになった。しかし、なぜ東に置かなければならないのか、その理由は聞き取りからは得られなかった。

6. おわりに

ホイアンの家屋調査から台所とオンタオ祭壇の配置を中心に述べてきた。ホイアンの事例から自然方位の東側に昔のカマドが作られ、そこでオンタオが祀られていることが明らかになった。ここでは、カマドと祭壇を東に置くことについて、「東厨司命灶君」という尊称とチャン・ゴック・テムとフィン・ゴック・チャンが記した八卦やオンタオと火との関わりから少し考えてみたい。

「東厨司命灶君」の「司命」とは、文字通り命を司る意味である。中国において竈神が司命と関わりをもつことについては、晋の葛洪の著書『抱朴子』に記されている³(葛洪 本田濟訳注 1990:123-124)。だが「東厨」については、道教大辞典に「東厨者庖厨也。」

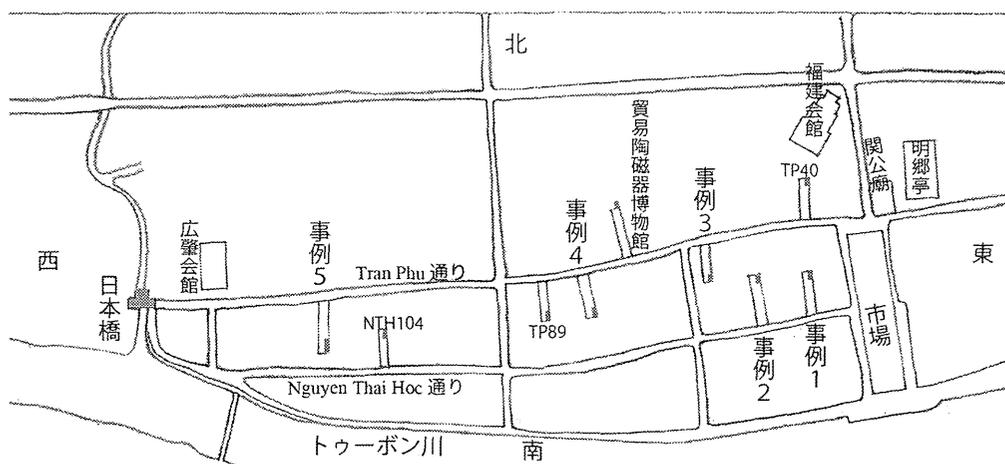


図21 ホイアンのカマドとオンタオ祭壇の位置

(中国道教協会、蘇州道教協会 1994:356) と記されている以外の資料は現時点では確認できていない。しかし、「司命」が泰山信仰と結びつき、泰山府君を司命神とする俗信があること(稲畑 1994:237)、泰山が国家の崇祀する五岳の筆頭として東方に配している(澤田 1994:365-366)ことから、竈神が東岳の泰山と結びつき東に祀られるようになった可能性が考えられる。事例2の字牌には「東厨 定福灶君」と書かれおり、東厨司命灶君として東に祀られていると考えることもできる。

次に八卦と火との関わりからみていきたい。1820年のベトナム南部の地志『嘉定通志』⁴には、「又祀灶神、左右畫二男形、中間一女形、亦象離火二陽中以一陰爲主之義、」と、オンタオ祭祀と八卦の火を結びつけた記述がある。八卦の「離」☲は火を表し、後天八卦では南に位置するが、先天八卦では東に位置する。オンタオの女神1柱・男神2柱を二陽一陰として、八卦から見れば先天八卦を用いた方位であると言える。しかし中国では、基本的に後天八卦を用いて風水の判断をしてきた。そのことを考えると、ベトナムの風水が先天八卦を使用して方位を決めていたのかという点に疑問が残る。

次に五行思想からみると、「火」は南を位置し赤色で表される。ホイアンのオンタオ祭壇や字牌などに赤色が強調されているのは五行思想の影響とも考えられる。しかし五行思想では、火を位置する南に火に関係するカマドを置きオンタオを祀るとするのは考えにくい。一方で相生の関係「木生火」としてみれば、「木」の位置である東にカマドを置くことも十分に考えられる。トアン・アイン(Toan Anh)は、送神儀礼で供えるオンタオの紙の帽子(冠)は、毎年五行に従って色が決まっていると記しており(Toan Anh 1997(1967): 115)、五行八卦がオンタオ

祭祀に大きく影響をしていることは確かであろう。しかし、現段階ではカマドやオンタオ祭壇の配置との関係性は明らかにできない。

今回、ホイアンの家屋から居住空間のどこに台所(カマド)が置かれ、どのようにオンタオが祀られているかについて事例報告をおこなった。全ての事例において自然方位の東側にカマドが置かれ、現在は使用されていない昔のカマドでオンタオが祀られ続けていることを明らかにした。それは東という方位に祀ることが重要であると人々が意識していることが分かった。東という方位には、オンタオの尊称である「東厨司命灶君」や五行八卦の影響が関係していると考えられる。しかしその関係性、東に置かれるカマドとオンタオ祭壇の理由は今回明らかにすることができなかった。

今後、ベトナム風水や中国風水、ベトナム人による建築研究から家屋建築と風水の関係などの調査をおこなっていく必要がある。そしてベトナムの他地域の家屋調査を通してオンタオの配置にどのような傾向がみられるのか、人々はどのように意識しているのかを分析していく。また、ベトナムだけでなく中国や風水思想をとり入れた韓国や台湾、沖縄との比較もおこなっていきたいと考えている。

謝辞

本稿は2013年度修士論文の一部を再構成し、加筆修正したものである。ホイアン調査をおこなうにあたり、菊池誠一先生、故西村昌也先生、小野田恵氏、ホイアン遺跡保存センター長 Nguyễn Chi Trung 氏をはじめ、調査に協力をしていただいたホイアンの皆様、心より感謝申し上げます。

参考文献

稲畑耕一郎

- 「司命」野口鐵郎他編集『道教事典』平河出版社：236-237、1994
- 葛洪 本田濟訳注
「内篇卷六 微旨」『抱朴子』平凡社：116-135、1990
- 菊池誠一
「第2章ホイアンの位置と歴史的環境」『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.8：7-10、2002
- 澤田瑞穂
「泰山」野口鐵郎他編集『道教事典』平河出版社：365-366、1994
- 昭和女子大学国際文化研究所紀要
『ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.1、1994
『ベトナム伝統住居の保存と再生』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.5、1999
『ベトナム伝統住居の体系的研究Ⅰ－所在調査と意匠技法の編年－』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.7、2001
『ベトナム伝統住居の体系的研究Ⅱ－文化財保存の国際協力－』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.10、2005
『ハタイ省ドゥオンラム村 集落調査報告書』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.11、2006
- 久布白兼昭・福川裕一
「ホイアンの町屋とフエの民家」『ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.1：45-52、1994
- 平幸夫・羽生修二
「ホイアンの建築と装飾」『ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.1：40-44、1994
- 中国道教協会、苏州道教協会
「东厨司命」『道教大辞典』华夏出版社出版发行：356、1994
- 友田博通 林良彦
「ヴェトナム・ホイアンの伝統的町並み」『建築雑誌』Vol.115：34-37、2000
- 友田博通 篠崎正彦
「第1章ベトナム伝統住居の体系的研究」『ベトナム伝統住居の体系的研究—所在調査と意匠技法の編年—昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.7：1-6、2002
- 奈良文化財研究所
『ベトナム社会主義共和国 トゥアティエン・フエ省 フォックティック村集落調査報告書』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所、2011
- 福川裕一 友田博通
「歴史都市ホイアン ベトナムの都市と建築3ホイアン」『SDスペースデザイン ベトナム建築大博覧』第378号 鹿島出版会：80-88、1996
- 三尾裕子
「中国系移民の僑居化と土着化—ベトナム・ホイアンの事例から—」『東アジアからの人類学—国家・開発・市民—』風響社：85-102、2006
- Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc
“Chương II :Táo Quân- Nhất Gia Chi Chủ” *Đặc khảo về tín ngưỡng thờ gia thần*, Nxb Văn hóa văn nghệ: 35-56,2013
- Toan Ánh
Nếp cũ Tín ngưỡng Việt Nam, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh,1997(1967)
- Trần Ngọc Thêm
Cơ Sở Văn Hóa Việt Nam, NXB Giáo Dục,1999
- Trần Thị Lệ Xuân
“BÉP XƯA TRONG DI TÍCH Ở KHU PHỐ CỔ HỘI AN” *Bản Tin của Trung tâm QLBT Di tích*, NXB Trung tâm QLBT Di tích Hội An, 2010
- 『嘉定通志』卷3、鄭懷德、明命元年（1820）

注

¹ ロイとは3間×3間の正方形で素朴な形式で、ベトナム中部住宅のプロトタイプである(垣内他1996:945)。

² ベトナムの土製支脚は、古くはフングエン期(4000BP-3000BP)から出土されている。ドンソン文化(紀元前3世紀-紀元前1世紀)を経て歴史時代、近年まで形態の変化はあるが継続して使用されてきている。フングエン期の土製支脚は梅原末次(梅原1944:75-78)、ドンソン文化の土製支脚は西村昌也(2011:49)が報告をしている。またハノイ歴史博物館にはフングエン期、ドンソン文化の土製支脚の展示がある。

³ 『抱朴子』内篇卷六、微旨篇「天地に過ち

を司る神があり、人の犯した罪の軽重に随ってその算(命数)を奪う。算がへると、その人は貧乏したり、病気になったり、たびたび心配事に遇う。算が尽きれば人は死ぬ。算を奪われるべき罪状は数百条あり、一々述べきれない。またこうも言う、(省略)そのほか晦日の夜、竈の神もまた天に昇って人の罪状を報告する。罪の大きな者に対しては紀を奪う。紀とは三百日である。罪の小さな者に対しては算を奪う。算とは三日である。」

⁴ 1820年鄭懷徳撰、広南朝時代から阮朝初期にかけてのコーチシナ全域(現ベトナム南部)の地方志(藤原利一郎1975:707-708)。

新刊紹介

津波高志著

『現場の奄美文化論—沖縄から向かう奄美—』

話者の話によく耳を傾け、自身もよく語り、そしてよく飲む…著者のフィールドワークのスタイルが手にとるように伝わってくる電子書籍である。琉球大学法文学部の社会人類学教室で長きにわたり教鞭を執った著者(現在は名誉教授)が、沖縄や韓国済州島の研究と並行しながら、20年という年月をかけて歩きつづけてきたのが奄美群島である。奄美の民俗を、琉球文化と大和文化のせめぎ合いの中で生まれたものと捉える本書の基本的視点は、まさに沖縄県北部生まれの著者がフィールドワークの現場で掴みとってきた確かな実感に基づくものといえる。

本書では、以下のとおり、大きく3つのトピックが9つの章に分かれる形で論じられている。

序章 奄美へ

第一部 変わりゆくくちの墓

第一章 与論島デジカメ民俗散歩

第二章 小湊における両家墓

第二部 相撲の諸相

第三章 奄美の相撲

第四章 伊仙町木之香の組んで始める大和相撲

第五章 伊仙町阿権の禪に帯の鳥相撲

第六章 大和村大棚の豊年祭相撲

第七章 土俵までの歩み

第三部 ノロの婚姻

第八章 加計呂麻島於斉の調査ノートから

第九章 ノロの不婚説と可婚説

終章 奄美から先島へ

葬墓制から豊年祭の八月踊りと相撲、ノロ制度、谷川健一論まで、沖縄や奄美の民俗を研究する者でなければ、少しばかりとっつきにくさを感じるであろうトピックを、とてもわかりやすく、そしてユーモラスに論じたこの本は、奄美文化の入門書として、そして民俗学的・文化人類学的フィールドワークの入門書として、一読をおすすめしたい一冊である。

(藤川美代子)

電子書籍 2014年9月刊

おきなわ文庫